

国際社会において、受容・発信する能力の育成

—その1—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

高橋 深美・秋元 佐恵・須田 智之
多尾奈央子・八宮 孝夫・平原 麻子
山田 忠弘

国際社会において、受容・発信する能力の育成

—その1—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

高橋 深美・秋元 佐恵・須田 智之
多尾奈央子・八宮 孝夫・平原 麻子
山田 忠弘

要約

今年度より本校はSSH研究指定校として3期目のサイクルに入った。新規研究開発課題は「豊かな教養と探究心あふれるグローバルサイエンティスト(global scientist)を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」となっており、6つの研究の柱の中には「(iv)国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が位置付けられている。また、ここ数年で本校生徒が海外で研修をしたり研究発表を行う機会が増えてきた。今年度は、東芝地球会議(タイ)、オーストラリア理数系授業体験プログラム(オーストラリア)、台中高級第一中学校研究交流(台湾)、Thomas Jefferson 高校サイエンス研修(米国)、釜山国際高校訪問(韓国)等のプログラムが実施され、多くの生徒が参加している。この状況を踏まえ、英語科は普段の授業の中でよりいっそうのプレゼン能力向上を意識しつつ、外部からスピーチコーチを招くなどして標記の研究プロジェクトを5年計画で進行させている。

キーワード：グローバル・サイエンティスト、英語プレゼンテーション能力、受容、発信

1. はじめに

予定はないことを付け加えておく。

1.1 英語科の授業構成

本校英語科では中高6ヵ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6年間で基礎期[中1・中2]・実践期[中3、高1]・発展期[高2・高3]という3つの段階に分けて位置づけ、それぞれの特徴に応じた指導にあたっている。

授業構成は以下のとおりである：

中学1年生～中学3年生

「英語」4時間(LL・TT各1時間を含む)

高1 「英語I」3時間+

「OC I」2時間(=TT1+LL1)

高2 「英語II」4時間(TT 1時間を含む)

高3 「リーディング」3時間(自由選択)

「ライティング」2時間(自由選択)

来年度より高校英語は科目内容が変わるが、本校は従来より「英語は英語で教える」ことやコミュニケーション活動を重視した教育を行っており、新学習指導要領に変わったからといって特に目新しい事を始める

1.2 英語科の取り組みの指標

本校の学校教育目標は「本校の教育目標である『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」である。また、今年度より新規にスタートしたSSH研究開発課題として「グローバルサイエンティストの育成」が掲げられ、そのための手段として「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が標榜されている。英語科はこれらの課題達成に積極的に貢献する所存である。

本稿では、まず本校の国際交流の機会について述べ、次にこの1年間の英語科の取り組みを振り返る。最後に、国際交流に当たって、英語科でどのように支援したかを報告する。

2. 本校の国際交流

本校は過去 10 年間にわたってスーパーサイエンスハイスクール (SSH) に指定され、海外の高校との研究交流実績を積みあげてきた。今年度からはさらに、国際社会での活躍を前面に押し出した第 3 期目の研究開発に入ったところである。また一昨年度より筑波大学はその附属学校に対して「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の 3 拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会が確実に増えてきた。

2012 年度の国際交流活動事例を以下にあげる

<SSH 関係>

- a. 台湾台中高級第一中学校訪問 (授業参加、英語による研究発表交流)
- b. 釜山国際高校との相互訪問
- c. 米国トーマス・ジェファーソン高校サイエンス研修 (=横浜サイエンスフロンティア高校コア SSH への参加)
- d. 台湾での研究発表、JSSF での口頭発表・ポスター発表・他国生徒との共同作業 (=立命館高校コア SSH への参加)
- e. オーストラリア理数系授業体験プログラム、成果発表会 (=小石川中等教育学校コア SSH への参加)

上記 ab は本校が独自に開発したもの、cde は他の SSH 校のコア企画に招かれて参加したものである。

<SSH 以外>

- f. 東芝地球未来会議(タイにて環境問題について英語で討論)
- g. EU 代表部による本校での勉強会
- h. ジャパン・リターン・プログラム(JRP)による外交官との交流会
- i. ノーベル賞受賞者とのHOPEダイアログ参加
- j. 日本学術振興会によるサイエンスダイアログへの参加
- k. 筑波大学教員研修留学生との交流

このように多彩な機会を通じて生まれる生徒の気づきを大切にしながら、英語学習にさらに意欲的に取り組んでくれることを願いつつ、日々の授業を展開している。

3. 各学年における取り組み

3.1 中学 1 年生 (66 期) 担当：須田智之

3.1.1 はじめに (基礎期のスタート)

生徒達は小学校での英語授業を経験してきており、入学後間もなくすると学校外でも自主的に英語学習に取り組む生徒も多い。4月に実施したアンケートでは小学校での英語は苦手であったという生徒もいれば、英検 4 級～準 1 級 (帰国生も含む) を既に取得している生徒が 20 名程いるなど、様々なレベルの生徒がいることが分かった。英語への興味関心が高い生徒や自主的な学習に取り組む生徒が多い現状の中で、本校の英語授業での最終目標は「コミュニケーションの手段としての英語を身につけさせること」・「知識に留まらない英語運用力を養うこと」であると考え、実際の授業を組み立てている。

3.1.2 授業での取り組み

英語の週配当時間 4 時間は 3 つの要素から構成される。「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」 2 時間、「LL 教室で聴解能力の訓練をする時間」 1 時間、「ALT とともに実際に英語を使ってみる時間」 1 時間という組み立てである。

以下に授業の概要を述べる。

(1)教科書中心の授業 (週 2 時間)

New Crown English Series 1 (三省堂) を使用し、音読を大切に授業を行っている。また、音声面強化と Warming-up、更には文法事項の導入を兼ねて、英語の歌を紹介している。1 学期には映画 *The Sound of Music* より “Do-Re-Mi” “Edelweiss” の 2 曲を、2 学期には夏休み自由課題として生徒に取り組ませた英語の歌紹介の結果を踏まえて “Stand By Me” や “Help” “She Loves You” “Let It Be” など The Beatles の楽曲を中心に紹介した。

(2)LL 教室での授業 (週 1 時間)

LL 用コースブック *Listen First* (Oxford 大学出版) を使用し、リスニング力向上を図っている。

(3)ティームティーチングの授業 (週 1 時間)

New Zealand 出身の ALT と共に行う授業で、教科書ではカバーできない日常的な単語を多く取り上げて語彙力増強を図りつつ、既習の文法事項を定着させるために意味のある言語活動を行い、実際に使える英語力の育成を目指している。

3.1.3 その他、授業外での取り組み

(1)パフォーマンステスト

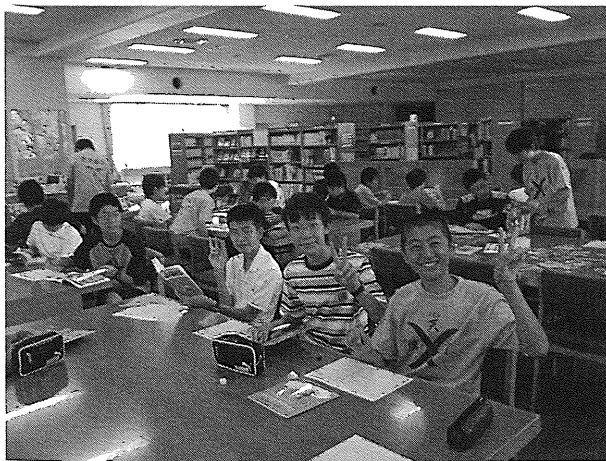
学期ごとのパフォーマンステストとして、スピーチを行っている。1学期には英語での「自己紹介」を、2学期は筑駒での学校生活・授業や先生方について、あるいは校舎内の様々な場所についてグループで紹介する“School Life in Tsukukoma”を実施した。3学期は「僕の好きな人物紹介」などを実施予定である。スピーチをさせる時の評価のポイントとして①Speak clearly. ②Eye contact. ③Speak logically.の3点を重点的に指導している。

(2)副教材など

英語力を定着させるためには週4時間の英語の授業(=総計200分)だけでは足りないのは明らかである。生徒にはNHKラジオ講座『基礎英語1』(物足りない生徒には『基礎英語2』または『基礎英語3』)などの聴取を奨めている他、文法学習用の自習用教材として『マーフィーのケンブリッジ英文法(初級編)新訂版』(Cambridge University Press)を、リスニングの追加教材として *Curious George* など簡単な読み物の音源を配布して聞かせるなど長期休暇の際の課題を工夫している。

(3)多読

約200冊の多読用英語書籍を購入し、図書スペースを使って多読の試験的導入を開始した。また、Penguin Active Reading シリーズの中から *The Long Road* (Penguin Education Limited)を冬休み課題として全員に読ませた。今後は蔵書数を徐々に増やしていくと共に、貸し出しも含めた英語読書の指導を奨励していきたい。



図書スペースにて：英語多読の様子

3.1.4 今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、授業と生徒の自主的な学習の相互作用をいかに深めていくかが今後の課題である。

3.2 中学2年生(65期) 担当：八宮孝夫

3.2.1 はじめに

中学1年生では、名詞の単数・複数形の区別や基本時制など英語の最も基盤となる文法項目を学んだ。中学2年生では不定詞や受動態、比較級・最上級などを学び、表現の幅をぐっと広げることが目標になる。一般に教科書では1学期に過去形の復習や *there* 構文などが中心となり、2学期に不定詞、比較級・最上級、3学期に受動態というふうに、習得が難しい項目が後ろに回っているケースが多い。しかし、習得が難しい項目ほど、早めに出しながら、繰り返し繰り返し塗りなおしていくようなスパイラル方式の学習が必要である。その実践を報告したい。

なお、筆者は基本的に Oral Introduction を通じて生徒と英語でやり取りをしながら内容を導入し、本文に入るという授業形式をとっている。

3.2.2 1学期の実践

扱ったテーマと文法項目を挙げ、簡単な解説を付す。

1) *20,000 League Under the Sea* (1年の復習)

中学1年の最後に「春休み課題」として、Penguin Readers 中の Beginner (300語レベル)として上記『海底2万マイル』を配布した。平易にかかかれているが、原文の Captain Nemo の不思議な存在感がよくあらわれており、挿絵も多く内容の助けとなるので採用した。わずかなページ数の作品であるが、中1で学習した文法の復習もかねて課し、2年の初めの数時間、CDで朗読を流した後、内容確認しながら扱った。

2) *New Zealand* (比較級・最上級)

本校ALTの出身地がニュージーランド(NZ)なので、TTの時間を利用して日本とNZのさまざまな比較をした(面積、人口、山脈や河川の長さなど)。

3) *A Priest in a Mask* (不定詞 I want to ... / ing 形 enjoy ...ing)

メキシコの孤児院を運営している牧師が、覆面レスラーとして運営資金を稼いでいる、という話。ここでは、不定詞とか動名詞とかは意識せず、動詞の後に動詞を続ける場合は、そのまま続けることはできず、動詞によって *to* を伴ったり、*ing* を伴ったりするこ

とを理解させた。

4) The Story of John Manjiro (不定詞 2 形容詞用法・副詞の用法 / 受動態 1 基本)

漁師の万次郎が、嵐で遭難し米国船長に助けられ、米国で暮らし、日本人として日米の架け橋になったという話。この課では、不定詞のさまざまなバリエーションを意識的に出しているの、あえて全ての用法を出しながら、to…のもつ共通したイメージを理解させた。また、話の流れの中で、能動態より受動態で表現した方が自然な文脈が出てきたので、受動態も基本的なことを導入した。例えば：

Gold was discovered in California in 1849.

やはり、能動態と受動態は単なる表現の言い換えではなく、受動態の方が適切な文脈があるので、そういう機会を大切に導入したい。

3.2.3 夏休みの課題

1 学期中に、比較級、不定詞、受動態の基本を導入することのメリットは、夏休みのリーディング課題の選択がぐんと広がることである。英米の graded readers では、語彙数でレベルを分けていても不定詞や受動態は Beginner レベルから使用されていることが多い。中学生が読むに堪えるような、少しでも複雑な話になれば不定詞のような基本構造は使わざるを得ないからである。その点で、MacMillan Readers 中の Beginner (600 語レベル)、*The Adventures of Tom Sawyer* は格好の読み物である。1 学期の既習文法（とりわけ不定詞）が頻繁に出てくるので、内容を取らせながら、既習文法が使用されている文をレポートに書き出してくるように指示する。ある文法項目を学習したならば、そこからあまり間を置かないうちに、その項目が別の文脈で使用されている場面に出会うことで、その文法項目の理解が深まり定着すると思われる。

3.2.4 2 学期の実践

1) Uluru (比較級・最上級の復習、look + 形容詞)

教育実習生に担当してもらった課で、1 学期の項目の復習に重点を置いた。オーストラリアと日本の大きさや人口を比較させたり、Uluru という巨石と東京タワーの高さ比べをさせたりして、運用力を高めた。

2) *The Adventures of Tom Sawyer* (不定詞 3)

夏課題で読ませたもので重要な点を確認した。既習以外の不定詞表現として <want + O + to ...> がいくつか出てきた。例えば、有名な塀のペンキ塗りの場面で：Tom wanted other boys to paint the fence.

いわゆる SVOC 構文の本動詞の後に other boys to paint のような「ネクサス関係」にあるような構造は英語の中に多数見受けられるので、中学 2 年の後半くらいからは徐々に意識させ、導入した方がよい。これも、様々な動詞パターンがあるから（目的語の後に取るのが原形不定詞・to 不定詞・ing 形・過去分詞など）、何度も塗りなおして進めていくことが必要である。

3) From Failure to Glory (現在完了形)

山中教授がノーベル賞受賞ということで、タイムリーな話題なので投げ込み教材的に扱った。受賞した時のホットな時に、例えば：

Professor Yamanaka has recently won the 2012 Nobel Prize in physiology or medicine.

「現在完了進行形」は高校で扱う項目であるが、「過去からの継続」を示すのに必要な形である（完了や経験は過去形でも代用可能である、とりわけ米用法では）。決して複雑な形ではないので、これも早めに導入したい。

4) India, My Country (受動態 2 復習・応用)

この課は、様々な形の受動態表現が出てくる課である。1 学期にすでに扱っているものであるが、復習として次の 2 つをあげた。

①特に主語を明示する必要がないために受け身にする場合

Marathi is his mother tongue. It is spoken in western India.

②あえて by 以下を出すことで、動作主を強調する場合

Then the British came. India was ruled by them.

また、形式上は受け身であるが内容的には受け身と感じられない場合もある。

③India is located in the southern part of Asia.

この例とは異なるが、感情表現なども受け身で表すことが多いので、今まで表現として出てきたものをここでまとめた。

ただ、筆者自身、インドに行ったことがないため、日本とインドでの言語使用の違いなど、十分深められたとはいえず、その点が反省点である。

3.2.5 発表活動

夏課題に上述の *Tom Sawyer* を課すのと同時に、英語関係の何か（英語に関する日本語の本、学習者向けの英字新聞の記事を読む、自分で読めるレベルの英語で書かれた物語を読む…etc）をおこなう、という自由

課題を出しておいた。以下はその実際の例である：

やさしめの英語の物語

*Three Short Stories by J. R. Kipling

**The Cat in the Hat*

**Magic Tree House* (Dinosaurs before Dark)

*週間 ST,

**The Asahi Weekly* ... etc

英語に関する日本語の本

「英語の語源探訪」(織田哲司)

「日本人はなぜ英語が下手なのか」

「ネイティブに嫌われる英語」

「英語辞書の使い方」(外山滋比古)

「英語の歴史」(寺島盾) ...etc

その他の取り組み

- ・英文日記(夏休みの出来事を英語で日記風に書く)
- ・英語の音楽の聞き取り
- ・Violin の用語のまとめ
- ・各博物館の英文パンフレット
- ・英文旅行記 ...etc

以上のように、各自がそれぞれの課題に取り組んだので、それをクラスで発表し共有することが有益と考えた。学期末のパフォーマンス・テストは、この「自由課題を2分以内で紹介する」ということにした。もちろん、活動によっては、英語で説明しにくいものもあるので、その場合は無理強いせず、他のことの紹介でも可とした。

一例を示す：

Do you know anything about Yufu-in? In the summer vacation, I visited Yufu-in. (地図) Yufu-in is located in Oita Prefecture. Where does the name Yufu-in come from? The word “Yufu-in” is made of two words – “Yufu” and “in.”

In Yufu-in, there are many mitsumatas. (写真を見せ Mitsumata is a tree for paper) In old days, people made beautiful cloths of those trees. They were given to the Imperial Court (朝廷) and were called “Yufu(木綿)” And also “in” means some sort of warehouse in Japanese. In those days, there were many warehouses for “Yufu.” there. So these historical facts lead to the word “Yufu-in.”

この生徒は、「湯布院」という温泉について紹介したのであるが、肝心の Yufu-in is famous for hot spring.ということに言及しなかった。しかし、地図やミツマタの写真を用意し、メリハリのある、ゆっくりとした英語で非常に説得力のあるスピーチを行った。

全体的に言えば、説明しやすいテーマとしにくいテーマがあり、評価の対象とする課題としては、必ずしも適切なものとはいえない面があった。ただ、発表の観点からいうと、これまでは発表させた後フィードバックの時間はとらなかったが、今回は他クラスのいい発表例などを見せることによって、優れた発表はどんな点が良いか、ということを指摘し、フィードバックすることができた。

3.2.6 おわりに

以上、2学年になってから扱った課について概観した。ただ、ある内容を教師が説明し生徒に理解をさせるだけでなく、上の発表活動のように、お互いが、あるテーマについて既習項目を使って英語で書き、発表しあうことで、ほかの生徒からさまざまな表現を学ぶことが少なくない。

結局、教師が与える知識は微々たるものなので、むしろ生徒が体験しあったことをお互いシェアするような体制でいくと、より豊かな学びの空間になるのではないか、というのが最近の実感である。

3.3 中学3年生(64期) 担当：高橋深美

3.3.1 はじめに(実践期のスタート)

6年間のシラバスの中で「実践期1年目」として過去2年間で得た基礎知識を少しずつ統合させ、コミュニケーション(必ずしもオーラルコミュニケーションに限定せず)の手段として使っていけるよう、スキルを高めることに重点を置いている。

本学年では筆者が JTE 単独の授業(2単位)+LL 授業(1単位)+TT 授業(1単位)全てを担当している。教材は、単独授業では三省堂の *New Crown English Series 3* (本年度改訂版)を基本に各課の題材について少し発展的な読み物を加え、LL では年度当初は引き続き、*Basic Tactics for Listening Second Edition* (Oxford)を使用した。このシリーズが改訂されたのに併せて、5月末より *Developing Tactics for Listening Third Edition* (Oxford) を使用している。

TT では *Side by Side* (Pearson Education) を input/output 時に活用しつつ、独自に作成した教材を使用している。

現在完了形・後置修飾・関係代名詞等、中学3年生で扱う大きな文法を種々の演習問題が解けるまでの単なる知識として終わらせず、「知っていることを必要な時と場合に運用することができる」力をつけることと、英語の授業を通じて、様々な事柄に関心を持たせるよ

う働きかけることを指導の目標としている。

3.3.2 具体的な取り組み

3.3.2.1 JTEによる授業（LLを含む）

以下に上述の目標達成のために日々の授業で実践したことおよび考察すべき点を挙げる。

① リーディング

「読む」ことは単なる和訳、つまり記号の置き換え作業ではなく、筆者と読者の間にコミュニケーションが成立しなくてはならないことを理解させることに重点を置いた。教科書も改訂されて、各レッスンにはある程度の長さのリーディング教材があるが、このほかに1回で完結する投げ込み教材を用意して、概ね1レッスンが終わるたびに読解演習をした。

このほか、ある程度の長さの読み物教材として、1学期に *Sadako* (Eleanor Coerr / Ed young) を、2学期前半に *The Black Cat* を数回に分けて使用した。*Sadako* は副読本として出版されているものは約5800語であるため、Puffin Books より出版されている、絵本版（約2500語）を4回に分けて学習した。*The Black Cat* (Edgar Allan Poe) も数社から出版されているが、語彙、英文の水準から Penguin 版を使用した。

なお、発音については2年次までの担当者が丁寧に指導してくれていたため、それを継続している。

② 語彙

ある語について、既知の語義を持つ場合、生徒達はその情報から何とか言葉を置き換えて文意を捉えようとするが、思い通りに運ばないことが増えたと実感している。もはや目の前にある英文（音声で伝えられるものも含めて）が、一単語一訳語の対応では正しく文意を捉えることができない水準になってきたからである。

これには、やはり辞書の訳語のうちから適切なものを選択するという過程を踏まえつつ、帰納的に語義を獲得することも視野に入れて指導している。

ともあれ、語彙の獲得には意図的な記憶をせざるを得ない面もあり、特に単語集を渡したりしているわけではないが、既出の語彙についてはできるだけ記憶するよう促している。

③ 音声（LL授業）

主としてリスニング力を高めるため、週に1回、LL教室を使用している。

意図していることは、以下の通りである。

- ①まとまった量の英語を聞いて概要を捉える。
- ②テキストに設問として与えられている事柄をヒントに、聞き取るべきポイントを理解する。
- ③アメリカ英語だけではなく、他の英語の音声にも触れる。
- ④会話特有の表現を学習する。

3.3.2.2 ALT とのティームティーチング（TT）授業

TT ではできるだけ生徒の発話活動を促すことを念頭に置き、主として以下の活動を行っている。

- ①ペアワーク
- ②スピーチ
- ③ディスカッション、ミニディベート

①については、新たな文法事項を使用するパターンプラクティスを行う等、オーソドックスなものを取り入れているが、中学3年生になると、あまり簡単なものは飽きてしまうし、また友人関係が長くなっているため、緊張感を持たせるのが難しい。

②については、これまで New School Year's Resolution, My school trip to Toyama, My favorite words, His Summer Vacation, How Can I Change the World というテーマで5回行った。初期の頃は「間違えないようにやろう」「とりあえず話せばいい」という意識がなかなか払拭できなかったが、11月末には一人1分30秒で行ったが、かなり堂々としたスピーチができるようになった生徒も多くなった。

③については、Which do you prefer, a house or an apartment? のようなテーマでグループディスカッションをする、ある resolution について、小グループに別れて、affirmative または negative のいずれかの視点で意見を出す等の活動を行っている。これについても、生徒は概ね楽しげにやるが、発表の段階になると、まだ原稿を「読んで」さっと自席に戻ろうとしてしまうことある。

②と併せて、いかに発表の能力を育成するかが、国際社会において、受容・発信する能力の下地作りとして重要な課題である。

3.3.3 今後の課題

過去2年間で得た基礎知識の統合と、コミュニケーション能力の向上に重点を置いて指導しているが、来期は更に SSH として科学的内容を間接的・直接的に使用して、「科学」的題材でコミュニケーションが可能になるようなものを学習材料として扱うことを考えて

いる。

3.4 高校1年生（63期）英語Ⅰ 担当：多尾奈央子

3.4.1 はじめに

中学で得た基礎知識を場に応じて実践力として使用できる力を着けるよう「実践期」としていかなる channel での input / output であろうと、場面設定を現実味のあるものにすることに重点を置いている。

本学年では筆者が JTE 単独の授業の英語Ⅰ（3単位）を担当し、別の教員が OCⅠ（TT 授業の1単位＋LL 授業の1単位）を担当している。

「読み」「書き」においては単にまとまりのある文章を速く正確に読んだり、書いたりすることができることに終始せず、行間や使用される（する）語句が状況に応じて選ばれている（選ぶ）ことをきちんと理解して言葉を映像として思い浮かべ（させ）ること、また各単元で学習するそれぞれの文法事項については種々の演習問題が解けるまでの単なる知識として終わらせず、「知っていることを必要な時と場合に運用することができる」力をつけるための学習を授業内外で行うことがいかに大切かを理解させ、それを実践することを指導の最重要目標としている。

3.4.2 教材と授業での取り組み

英語Ⅰで教材は大修館の Genius English Course 1 を基本に、各課の題材について極力題材の原典を中心に扱いつつ、さらに発展的なあるいは背景に関わる読み物を加えている。主として new words については学習者用英英辞典を使用して、日本語を介さずに語の意味を理解させ、例文から現実での使用場面等を提示している。本文は aural introduction で題材の背景を導入し、口頭での英問英答で概要を確認し、確認できた key words から自分なりに本文を再現させることに努めている。その後本文を提示し、内容を把握させる。内容を把握・整理できたところで、該当の文法事項を確認し、状況を思い浮かべながら chorus reading や read and look up をするという流れで進めている。次時には前時の内容を要約した文章に空欄を作り、本文とは異なる文章表記でも内容から正しい品詞等で英文を完成させる活動を行なうという流れで進めている。また基本的に週一回、語彙と基本例文の小テスト（15点程度）を行い、基本事項・語句の習得を促している。予習ではなく、復習への意識喚起を込めて。

授業は上記学習活動に関わるものをすべて一つのプリントにまとめ、一点に集中できるようにしている。

海外生活経験者、塾での学習で先へ先へと学習を進めている生徒もいれば授業で学習することが全て新出である生徒と習熟度は様々であるが、それぞれが活躍できる場ができるように極力多くの質問を投げかけ、誰もが萎縮せずに「間違えても」発することが初めの「一歩」ということを理解してもらうことに努めている。今後は英文要約や入試に関わる問題なども取り入れていく予定である。

3.4.3 今後の課題

学年が上がるにつれて塾に通ったり、通信教育などで進度を先に進めたりする生徒が増える中で、外国語学習が「語の置き換え」作業に終始される傾向がある。空欄補充・和訳英訳・整序などができれば良しと考えられることが増えていることが否めない中で、「実践力」とは何かを毎時間感じられるように学習指導要領の「英語の授業は英語で」という方針に基づき、どれだけ平易であろうが数多く英問英答を取り入れて、場に応じた速いレスポンスが英語のできるよう、さらには場に応じた「語」を選択使用できるように授業の組み立てや教材の開発および授業の実践を行ってきたい。

3.5 高校1年生（63期）OCⅠ 担当：平原麻子

3.5.1 はじめに

高校1年生では「英語Ⅰ」の他に「オーラルコミュニケーションⅠ」（2単位）を設けており、週に1時間ずつLLの時間とTTの時間を展開している。LLで発音や聞き取りの基礎訓練を行い、TTでは様々なトピックで積極的に発話することを旨とする。

以下、それぞれの内容について記述する。

3.5.2 LLでの授業

3.5.2.1 授業の概要

LLでは年間を通じ基礎訓練として1単位時間（50分）の中で、シャドーイング・まとまった内容の聴き取り練習・ディクテーションの3つを行っている。

この他、楽しみながら生の英語に触れさせるために定期的に映画も取り上げている。1学期には *Back to the Future*、2学期に *Kung Fu Panda*、3学期に *The Great Dictator* を扱う。このうち、2学期と3学期の映画は 3.5.4 で述べる実技課題にもつながっている。

3.5.2.2 教材

シャドーイング用教材としては、鳥飼(2003)や玉井(2005)を参考にした他、ケネディ大統領就任演説などの有名なスピーチ等を利用している。聴解練習用の教材には、*Developing Tactics for Listening* (Oxford 出版：リスニング演習のためのコースブック)、*National Geographic Footprint Reading Library* (Thomson Heinle 社：雑誌 *National Geography* をベースとし、動物の生活や世界の国々の風習など様々なトピックについて映像DVD・音声CD・小冊子がセットになっているもの)・*English Journal* (アルク出版)等がある。ディクテーションは、これらの教材を使って内容の聴き取りを行った後に、日本人生徒にとってトラブルスポットとなりやすい音声変化(音の連結、hの脱落等)が表れている部分を取り上げ、書き取りをさせている。

3.5.3 TTの授業

3.5.3.1 授業の概要

今年度はニュージーランド出身の男性ALTとTTを行っている。

授業の冒頭でウォーミングアップと部分ディクテーションを兼ねて英語の歌を歌ったあと、その日のテーマに沿った色々な表現を練習し、ペアワークやグループワークを経て最後に数名が全体の前で練習の成果を披露する、というのが基本的な授業構成である。

取り上げた英語の歌は、*Stand by Me・Everyday* などのオールディーズや、*Hey Jude・Let It be* などビートルズを中心に歌詞がシンプルで美しく歌いやすいものである。11月後半はクリスマスソングも扱う。

3.5.3.2 学期毎の授業展開

① 1学期

1学期は日常的な英語表現を使いこなすことを目標とした。LLの*Developing Tactics for Listening*で聴解訓練を行ったトピックを、次週のTTの時間で運用練習する、というパターンが基本になっている。

取り上げたトピックは、「知り合いになる」「贈り物をする」「感想を述べ合う」「アドバイスをする」「トラブルを解決する」「学校を案内する」などである。

また高校生で起業した少年の話を学習し、1学期のスピーチ課題につなげた。

② 2学期

2学期は曜日の関係で授業日数が少ないが、ディベートの基礎訓練を中心に授業を行っている。

まず最初に、日本人が苦手とする「反論」の練習を、ALT相手やペア同士で充分に行った。その後、ディベート形式に慣れるために、ピンポンディベートやテーブルディベートを行っている。これらの練習方法については、特に松本他(2009)を参考にした。

ディベートのトピックとしては、「共学がよいか別学がよいか」「制服がよいか私服がよいか」「SonyPSPがよいかNintendoDSがよいか」など、生徒に身近で意見が出やすいものを選んでいく。

③ 3学期

授業日数が極端に少なくなるため、まとまった活動はできないが、2学期に引き続き意見を述べるタイプのタスクを行う予定である。

3.5.4 O C I の評価

毎学期の期末考査では、LLとTTで学習したことの定着度を確認するためにペーパーテストを実施しているが、これに加えて実技テストを必ず行い、評価の重要な柱としている。課題は以下のとおりである。

<1学期>

①30秒程度のシャドーイングテスト(100wpm)

②「将来起業するなら」というトピックで2分程度のスピーチ

<2学期>

①1分程度のシャドーイングテスト(120wpm)

②Skit Show: 5人グループを作り、映画 *Kung Fu Panda* の中からの名台詞を幾つか引用し、8分程度のオリジナルスキットを書いて演じる。(名台詞の例 To make something special, you just have to believe it's special. / A real warrior never quits. / Yesterday is history, tomorrow is a mystery, but today is a gift. That is why it is the present.)

<3学期>

①映画 *The Great Dictator* ラストの Dictator Speech から一部をレシテーションテスト

②ペアを作り、有名人になりきって(「ドラえもん」と「のびた」など)3分程度の会話をする

スピーチやスキットに関しては聴衆用の audience sheet を配布し、生徒相互が楽しみながら評価しあうことも課題としている。

3.6 高校2年生(62期)英語Ⅱ 担当: 山田忠弘

3.6.1 はじめに(発展期のスタート)

高校2年生の英語は、英語Ⅱ(4時間)を3時間と1時間に分け、前者では Reading と Writing

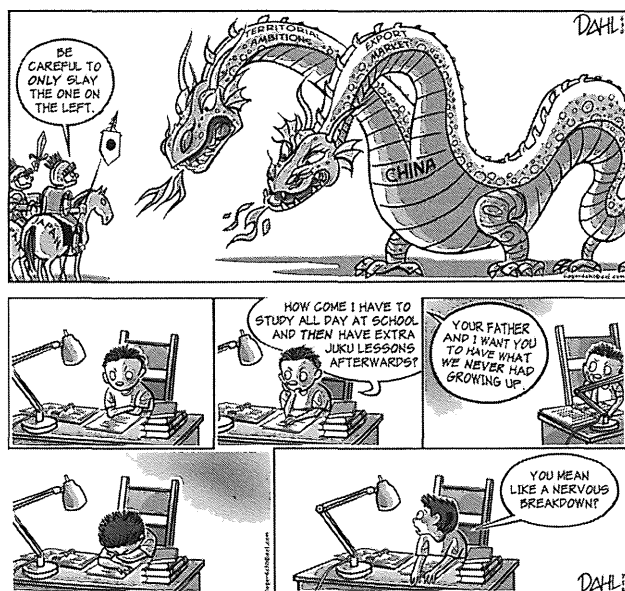
(Listening)、後者では Team Teaching による Speaking と分けられる。自分の担当する3時間においては、昨年度に引き続き、Reading は分量に応じたスピードで大意をつかむこと、Writing は自分のレベルに応じた正確な英語で、描写や意見を表すことを毎回の授業での目標としている。また昨年度までの LL での授業が今年度はないため、Listening もこの時間で行うことになる。

3.6.2 教材と授業での取り組み

教科書は啓林館 *ELEMENT English Course II* を使用し、昨年度同様、chorus reading (new words と text) → 自作プリントによる内容確認、演習という流れで進めている。また週に一度、単語と基本文の小テスト (20 点満点) を行い、基本事項・語句の暗記を促している。

昨年度と異なる点としては、教科書の本文を Warm-up Reading と位置づけて、扱う時間を極力短くし、最後の 20 分で、短編小説 (O. Henry や W. S. Maugham, Saki, Roald Dahl などの原典) を読んで質問に答える形式の演習を行っている。また配布するプリントには、昨年同様、writing 問題 (*The Japan Times* などからの自作や、大学入試問題など) を入れて、提出者には添削指導を行っている。2 学期からは補助的な演習として、英文要約やリスニング問題に取り組む回も適宜設けている。

例 1 : 絵を英語 (30 語程度) で描写させるもの



例 2 : 自分の意見を書くもの

「携帯電話は何歳から持たせるのが適当か (60 語程度)」

「科学技術の進歩はコミュニケーションにとって良いことか (50 語程度)」

「宇宙開発は予算の無駄使いかどうか (100 語程度)」

3.6.3 今後の課題

学年が上がるにつれて読解がウェイトを占めることから難しくはなってくるが、「英語の授業は英語で」という学習指導要領方針に基づき、簡単な英問英答を可能な限り入れて、平易な英語での速いレスポンスを問う「瞬発力」の訓練は随時行っていきたい。

3.7 高校 2 年生 (62 期) 英語 II:TT での取り組み

担当 : 須田智之

3.7.1 はじめに

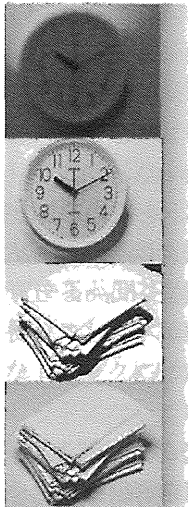
高校 2 年生の 4 単位中の 1 単位で、ALT とのチーム・ティーチング(以下 TT)により、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションやディベートを行うというのが筆者の担当である。

3.7.2 1 学期の授業

筆者は、昨年の高 1 時にも 62 期の LL と ALT との TT の授業を担当した。特に TT の授業では、生徒の十分な発話量を確保するのが難しい。1 学期の最初には他己紹介 (自己紹介は昨年実施済のため)、後輩へ向けての学校生活に関するアドバイスのスキット作成、皆既日食に関する英字新聞を活用してのディスカッション、6 月には「修学旅行での思い出について」と「将来の夢」についての 2 つの課題スピーチを実施し、評価の対象とした。

3.7.3 2・3 学期の授業

2 学期は、まずディベートからは少し離れるが、英語での言葉遊び・英語での言葉探しを体験してもらうため、Creative Writing に取り組ませた。昨年度高 3 生に応募を勧めた ESSC (Extremely Short Story Competition) という、50 語ぴったりで英詩などの作品を作るという学習者向けのコンテストに作品を応募してもらうことにした。以下は昨年度の生徒による入賞作品の例である。



Cicadas

Cicadas live underground for seven years.
But after going out of the ground, they can live only for a week.
People say they are poor.
But is that true?
Watch them.
They are singing. They look so happy.
What's important is not how long we live, but how we live.

Nakanishi Ryosuke

2 学期後半は映画 *The Great Debaters* を鑑賞すると共に、松本他 (2009) などを参考にしながら「日本の大学は9月から学年を始めるべきである。是か、非か。」という論題についてのディベートを学期末評価の課題として実施した。3 学期もプレゼン・ディベートなど発表活動を実施予定である。

3.8 高校3年生 (61 期) リーディング

担当：秋元佐恵

3.8.1 はじめに

6 年間のシラバスのなかで最終段階の「発展期」最終学年の高校3年。本校では高校3年の英語は選択授業となるため、若干各クラスの受講者数は減り、教科名も「リーディング」「ライティング」の2つとなる。

高校1年次から筆者が英語授業の柱としている「オーセンティックなインプット→インテイク→アウトプット」の流れに従い、以下の3つを授業目標とした。

- ① 視聴覚教材＋読解教材のコンビで、題材を深く学ぶ
- ② 今使われているオーセンティック英語のインプット
- ③ 最後に生徒に意見を書かせ、優秀作品から学ばせる

この目標を達成するために最も努力したことは、その時々々の生徒の好奇心に合った教材を探すことである。高校3年で受験が近いとはいえ、行事も目白押しの彼らが、そのとき何に興味を持っているか、何を知りたいのか—これは学年の担任として活動を共にしたからこそ分かったことも多い。以下、筆者から見て特に生徒の反応の良かった題材を、3つ取り上げて紹介したい。

3.8.2 授業での取り組み例

3.8.2.1 笑いについて (1 学期)

生徒たちはこの時期、文化祭の班でコントを作り始

めたところであった。また、ライティングの平原教諭から、「今度授業でジョークを作らせるつもり」との話聞き、前からやりたかった「笑い」について、この時期考えさせることにした。

使用した主な教材は以下のとおりである。

- ① Laugh Lab: finding the world's funniest Joke (山本、2011)
- ② Why do we laugh? (東大出版会、1998)
- ③ DVD: *Mr. Bean* vol.1-3 (2003)

まず①ではリスニングQAおよびリーディングで、いくつかのジョークや笑いの歴史について学んだ。

②はかなり長く難解な教材だが、それに30問ほどヒントとなるような読解問題をつけ、広い教室を使って一斉に読み始めた。半分まで解けた者は教室後ろの筆者のところまで来て添削を受けてから先に進む。最後にスクリーンに解答を写して解説をする。この方法では、様々なレベルの生徒がそれぞれの速さで読むことができ、こちらも生徒の出来を把握できるので、よかったと思う。3000語程度の長い教材を読ませるときには、この方法を使うことが多かった。

最後に③の映像で、笑いの構造について考えさせた。*Mr. Bean* を見たことがある者は多かったが、なぜこのイギリスの笑いが世界で普遍的に受け入れられるのか、書かせてみた。生徒たちは読解教材で学んだこともヒントにしたようだ。以下はその例。

● I think that we laugh at this movie mainly because we feel superiority. First, Mr. Bean's actions are absolutely ridiculous. Moreover, the customers of that barber shop are also foolish and cheated by Mr. Bean. This series of fools makes a sense of superiority.

● I think the deep structure of laughter underlying the episodes of Mr. Bean is that he behaves so strangely that our expectation is all broken. In short, people laugh at this unexpected twist.

3.8.2.2 GM foods について (2 学期)

これは自分が9月に偶然見たフランスのドキュメンタリー『モンサントの不自然な食べ物 (*Le monde selon Monsanto*, 2008 仏)』に触発されて急遽取り組んだ題材である。将来理系の研究者を目指す生徒も多い本校の生徒に、ぜひともこの問題を知って考えてほしかった。幸い映画館 (渋谷アップリンク) も、教育用ならばDVDを貸してくださるとのことで、ありがたかった。

使用した教材は以下の通り。

- ① Genetic Engineering
(*Contemporary Topics 1*, Pearson Longman)
- ② DVD: 『モンサントの不自然な食べ物』(2008)
- ③ Golden Rice (山本、2008)
- ④ GM に関するニュース記事・論文

①はアカデミック・イングリッシュの教材。講義を聞いてメモをとる形式である。これで GM の基礎を学ぶことができた。②はフランス語も多いが、米国の会社や政府関係者のインタビューはすべて英語なので、その部分を L1 教室でのリスニング問題とした。その後映画の感想も書かせた。③はちょうどその中で話題になっていた品種、一緒に読解した。④は生徒からの提供が複数あった。筆者自身も最新の論文を読むことで、この問題の根深さを改めて知った。

ちなみに 11 月上旬、アメリカで配信されたニュースによれば、カリフォルニア州で、遺伝子組み換え表示を義務化する法案の賛否について選挙をしたところ、モンサントなどのバイオ産業からの反対キャンペーンにより廃案となったそうである。(このニュースの要約問題を 2 学期末考査に入れて読ませた)。今後も TPP 問題とともに、生徒には考え続けてほしいトピックである。

3.8.2.3 米大統領選ディベート (2 学期)

10 月初旬よりアメリカの大統領候補によるディベートが始まった。ネット上に音声もあり、生徒も興味ある話題だったので、米選挙の仕組みとともに扱った。主な教材は以下の通り。

- ① “U. S. Presidential Elections” (柴原、2012)
- ② *Japan Times* 記事 4 編 (9/28, 10/10, 10/15, 10/24)
- ③ “The First Presidential Debate Oct. 3, 2012”
- ④ DVD: *Twelve Angry Men* (1958)

①は毎回優れた教材で、筆者もよく聴いている。ここでは選挙人(electors)などの語彙や、11 月の選挙までの流れを学んだ。②は 2000 語程度の社説を中心に、時間を区切って読解した。方法は 3.8.2.1 と同じである。③はネット上で音声もスクリプトも手に入ったので、やってみた。実際のディベートはかなり語彙も難しいので読解用、その前の司会者(moderator)のルール説明は簡単なのでリスニング用に使った。④は裁判映画の古典、モノクロではあるが、生徒は非常に熱心に見ていた。大統領選まで続くアメリカのディベート文化について、知ってほしかった。以下は上映後のコメントの一部である。

・This movie makes me believe the conscience of human beings.

・It is interesting for me that “the truth” is still unknown at the end of the movie. If it were created by a Japanese director, I think there would be an answer scene after the jury’s decision.

・The system of jury is a very nice idea because people who usually don’t care about a trial can get a chance to think about it deeply.

生徒は物語の面白さや登場人物の分析のほか、真実や道徳の問題、裁判員制度、日米の文化差、などについて書いていた。なお、2 時間を使って上映したあと、いくつかの場面を取り出してリスニングし、当時の脚本に書かれた人物描写の読解クイズを行った。

3.8.3 今後の課題

この 1 年、さまざまな題材を通して英語を読む・聞く訓練を行ってきたが、文学をじっくりと読解する機会が不足していたと思われる。というのも、筆者のなかに、どうも日本語で訳読してゆく、解説を加えてゆくことへの反発があったためである。高校 1 年から、わりと英語で授業を進めてきたために、そのほうが生徒の反応も授業のリズムも良い、ということもあった。しかし、あえてリズムを崩してでも、英語で文脈や行間を読むことも、生徒たちに必要な訓練だったかもしれない。次回高校英語を担当するときにはこれを課題とし、英米の古典や現代文学も含めてバランスよく扱いたい。

3.9 高校 3 年生 (61 期) ライティング

担当：高橋深美・平原麻子

3.9.1 はじめに

本校では高校 3 年生の選択科目「ライティング」(2 単位時間)を 2 名の教員が担当し、1 時間を文法・構文指導中心の授業、もう 1 時間をパラグラフ・エッセイライティング指導中心の授業と位置づけて指導を展開している。授業は副教材、各教員によるハンドアウトを中心に進め、*CROWN English Writing New Edition* (三省堂)を補助的に活用した。

3.9.2 文法・構文指導 (高橋)

3.9.2.1 授業の概要

文法・構文指導の 1 時間は、文法事項の復習と和文英訳を中心に授業を展開した。文法項目として扱った

ものは、時制、準動詞、仮定法、比較、譲歩表現、関係詞などであり、また英訳の技法として主語の取り方、受動態と能動態のバランス等を扱った。

授業を展開する上で心がけたことは、和文英訳といえども、単なる日本語から英語への置き換えではなく、訳者がコミュニケーションの媒体となること、すなわちそのメッセージの発信者が意図したことを正しく英語に変換し、メッセージの受信者に伝えるつもりで訳すこと、さらに、自然で文法的に正確な英語で訳すことである。

「自然な英語」ということは、例えば、「あの歴史書をひもとけば、おそらくその問題に対する手がかりが得られよう」という和文を英訳する際に、Reading that history book, chances are you will have a clue to the problem. という英文を書いた生徒がいる。この英文には文法的には誤りはないが、分詞構文と、chances are ~という表現は文体が違いすぎて一文の中に共起すると、自然な英語とは言えなくなる。

本校の生徒は数学的思考に長けている者が多いので、この部分にはこれが使えないはずだ、と日本語のまとまりに熟語、セットフレーズの類を当てはめる傾向が見られ、それが違和感なく使われているかどうか、ときに注視する必要がある。

なお、生徒の答案を添削すると、大きな文法事項は正しく使えても、時制の不一致、数、冠詞等の誤りが依然として多く見られ、母語が日本語であることを痛感させられる。

3.9.2.2 今後の課題

週1時間という限られた時間の中で、可能な限り沢山の例を示すと共に、英文を沢山書かせる必要性を改めて実感した。また、本年度は取り入れていないが、peer evaluation なども有効であると思われる。

3.9.3 パラグラフライティングの指導（平原）

3.9.3.1 授業の概要

色々なタイプの文章が書けるようになることを目標に、Introduction →Body →Conclusion というパラグラフの型と、様々なディスコースを導くつなぎ言葉 (discourse markers) を意識させながら、毎時間なるべく沢山書かせるようにしている。授業者の悩みは、書かせたあとのフィードバックであるが、ちょっとした空き時間をこまめに使って生徒の作品を読み、添削やコメントをつけてなるべく早く返却するよう心がけている。(が、現実には厳しい)

3.9.3.2 学期毎の授業展開

① 1 学期

パラグラフの型について学習したあと、まとまった文章を書くときに重要な文法事項として「時制」「冠詞」「可算名詞・不可算名詞」等について適宜、授業内で取り上げた。これらがいい加減だと、読み手が混乱する文章になりやすいからである。

同時に、パラグラフライティングの初歩として、「要約」から入り、次に「物語文」→「説明文」の順番で書かせていった。特に心がけたのは、いきなり書かせるのではなく、まずリスニングやリーディングを通じその日のトピックに関して考えるきっかけを与え、その上で書かせることである。実際に取り上げた課題は以下の通りである。

- ・海外へ行く生徒がお土産の相談をしている会話を聞き、その内容を要約する。
- ・Beatrix Potter の書いた、悪い兎に関する短い物語を、挿絵を見ながら聞き、その後日談を創作する。
- ・英語のジョークの色々なパターンを学んだあと、自作のジョークを創作する。
- ・自分が文化祭でどのような活動をするかについて説明する。
- ・あるものがなぜ人気があるかについて説明する。(「因果関係」のレトリックの練習)
- ・知らない人には同じに見えるが実は違う2つのものについて説明する。(「比較対照」のレトリックの練習)

② 2 学期

2 学期は、社会生活に不可欠な「謝る」「忠告する」「苦情を言う」といった実用的な文章の書き方を学ぶと同時に、「意見文」を論理的に書くことが中心となっている。

「意見文」に関しては、教師が一方的に読むだけではなく、ペーパーディベートの手法を使うなどして、生徒同士がお互いの意見を読み、賛成したり反対したりする機会をできるだけ設けるように心がけている。実際に取り上げた課題は以下の通りである。

- ・「筑駒事典」を作る (説明文)
- ・メールオーダーで頼んだものが間違っていたので苦情のメールを書く。
- ・家庭の事情で急に友達の結婚式に出られなくなり、メールで謝る。
- ・担任の先生たちの悩みを読み、アドバイスをする。(筆者が事前に担任の先生たちから悩みをつのり、英訳しておいた)
- ・ペーパーディベート「特別考査 (注：本校独自の校

内模試のようなもの)は廃止すべきである」

- ・先輩が書いた末期癌の患者への告知に関する意見文(毎年保存してある生徒作品)を読み、自分の意見を書く。さらに友達同士で交換して読み合い、相手の意見に対して自分のコメントを書く。

- ・「入試から英語をはずすべきである」という主張を読み、自分の意見を書く。

- ・「死刑廃止」の是非

その他、最後の授業では「高校時代でもっとも印象的だったこと」という課題でスピーチを書いて発表し、皆で思い出を共有しあって、なごやかな雰囲気が高3ライティングを終えることができた。

4. 総合学習での取り組み

4.1 概要

本校では総合学習の一環として、中学3年生にテーマ学習、高校2年生に「ゼミナール」という時間を設け、土曜日を活用しながら、普段の授業では扱えない内容を取り上げてそれらを専門的に深めていく学習を行っている。各教科がそれぞれに対して担当者とテーマを出し、生徒は自分がやってみたいものを選択して参加するシステムで、ひとつの講座で学ぶ生徒の人数は概ね10~20名程度である。

英語科はここ数年間、SSH校としての実践を深めるために、日本学術振興会(JSPS)が提供するScience Dialogueというプログラムを利用しながら、「国際社会において、受容・発信する能力の育成」に努めている。このプログラムの詳細についてはJSPSのHP(<http://www.jsps.go.jp/j-sdialogue/>)を参照していただきたい。希望実施日の2カ月前までに、講師派遣を申し込む必要がある。

4.2 中学3年生(64期)テーマ学習(年6回・土曜)

担当: 平原麻子

第3期目に入った本校SSHの重要な柱のひとつ「グローバルサイエンティストの育成を目指す」を意識して、今年度の講座名は『The Road to Global Scientists』と銘打った。

本講座の目標は(1)海外からの若手研究者に自分の国や経歴・研究内容について英語で講演してもらい、彼らと積極的にコミュニケーションを図る、(2)同時にプレゼン技術についても学ぶ、(3)彼らから学んだプレゼン技術を意識しながら、自分が研究したことを英語で発表する、の3つである。生徒にとってそれぞ

れのテーマは英語での理解が易しいとはいえないが、研究者の方々の工夫(簡単な実験を行う、映像を見せる等)と上手なプレゼンで、大体の内容は理解できている。

また、若手研究者の発表以外にも、「先輩に学ぶ」として海外研修派遣経験のある本校高校3年生に参加してもらったり、Steve JobsのスピーチやNHKEテレ*Super Presentation*の映像を使ったプレゼン技術研究の時間も設けている。

今年度の講義内容は以下の通りである。

表1. The Road to Global Scientists 年間計画

Date	Speaker	Topic
① June 9	—	全体オリエンテーション *各教科からの説明を聞き、自分の参加したい講座を選ぶ
② June 23	本校高校3年生(S S H台湾研修派遣生徒)	化学(色の特性) *昨年度の台中高級第一中学との研究交流で発表したもの
③ Sept. 15	Dr. Kullumadil (Austria)	応用物理学(癌治療への磁力の応用)
④ Sept. 29	Dr. Friedrich (Germany)	物理学(重力波の検出)
⑤ Oct. 20	Dr. Vandewalle (Belgium)	法学(日本とEUにおける独禁法)
⑥ Jan. 19	Dr. O'Connor (USA)	心理学(創造性と創造力)
⑦ Feb. 9	受講生徒自身のプレゼン	各自の興味に応じた内容

4.3 高校2年(62期)ゼミナール(年7回・土曜)

担当: 山田 忠弘

高2ゼミナールでは、今年度も日本学術振興会によるプログラム「サイエンス・ダイアログ」に参加している。この学年は中学3年テーマ研究に続いての参加となる。講師は、日本の大学機関で研究中の若手外国人研究者で、ほとんどが英語のノンネイティブスピーカーである。講義は2コマ分でパワーポイントを使って行われ、回によってはそれ以上(3~4コマ)が配

当されていることがあるので、その場合は事前に講師からいただいた単語リストやパワーポイントファイルなどを使って事前学習も行っている。

講師と講演内容は以下の通りである。

第1回 熱的快適性について (建築学)

Dr. Madhavi Indraganti

第2回 独占禁止法について (法学)

Dr. Simon Vande Walle

第3回 環境ストレスと植物の成長について (生物学)

Dr. Bart Rymen

第4回 骨と細胞について (歯学)

Dr. Lynett Danks

第5回 創造性についての素朴理論 (心理学)

Dr. Alexander O'Connor

生徒はこれらを参考にし、3学期には自分の興味あるテーマを分かりやすく英語で伝える発表 (15分程度) をパワーポイントを使って行う予定である。

5. 国際交流を支援する取り組み

5.1 はじめに

ここ数年で本校生徒が海外の人々と交流する機会が増えてきた。交流の目的は文化交流の場合もあるが、科学的な内容の研究交流が主流であるところがSSH校である本校の特徴といえる。英語科では、日常的な授業の中でプレゼンテーション能力を鍛える指導を行っているが、生徒が研究交流の場で十分な成果をあげるためには、さらに授業外での支援が必要となってくる。

以下に、国際交流支援活動の一部について述べる。

5.2 研究交流における英語科の支援活動

5.2.1 プレゼンテーション・スキル・ワークショップ

昨年度に引き続き、サイエンス・コミュニケーション・スペシャリストとして活躍中の Mr. & Mrs. Vierheller 氏を招き、希望者を対象とした英語での効果的なプレゼンテーション・スキルについて学ぶワークショップを第1学期期末考査後に開催した。

“Learn to Present”と題された本講座には中3から高3まで約60名の生徒が参加し、異学年集団を形成してグループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるためのさまざまなスキルであった。具体的にはスピーチをする際の声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについて、実際にグループで発表をしながら指導して頂いた。

3時間ほどのまとまった時間で達成感を得ることができ、普段の授業ではなかなかできない取り組みである。なお、3学期には中1・2を対象とした「ビギナーズ用ワークショップ」を開催する予定である。

5.2.2 台湾国立台中第一高級中学(台中一中)との研究交流へのサポート

台中一中との研究交流活動は今年度で4年目を迎える。これは生徒同士が各自のテーマに沿って行った研究を学会形式で発表しあうという本格的なもので、過去の発表テーマの一例をあげると、以下のようなものがある。

- ・ The Study of Liquid Crystal
- ・ An Analysis of Glom Protein
- ・ An Introduction to Corpus Linguistics

このように高度に専門的な内容を効果的に発表するためには、事前の発表原稿作成のみならず、見やすいパワーポイントの作成・発表手順の確認・発話の抑揚やスピードの確認、など準備しておくべきことが数多くある。

これらをカバーするために英語科は過去3年間、渡航直前の丸一日をさいて本番と同じ形の研究発表リハーサル会を開き、声の大きさや目線、パワーポイントの内容など細かなところまで点検し、気がついた点を様々アドバイスしてきた。また、昨年度からはよりプレゼン技術を強化するために、前項で触れた Vierheller 夫妻をお招きしてリハーサルを行っている。その場でやらせながらどんどん直していく彼らの手法 (immediate feedback) は大変効果的で、生徒たちも自分たちがどんどん良くなっていくことを大いに実感している。現地では、生徒同士でコーチングする姿も見られた。

今年度は各グループに10分ずつ発表させ、それに対して10分間アドバイスをいただく、という方式で行った。作成したパワーポイントに提示すべきもの、口頭発表に回した方がいいもの、プレゼンに適した語彙(例えば、aim より objective の方がよい) まで含め、非常に具体的に指導をしていただいた。

昨年度の論集でも触れたが、今後も有益なアドバイスを再掲しておく。

① First tell, second show

まず、口頭で述べてから絵やグラフを提示すべし。はじめに情報を提示してしまうと、相手は聞かなくなる。

② Repeat important things

大切なことは繰り返すべし。

③Short message in large prints

パワーポイントで提示する文字は最小限に。また大きな文字で示すべし。

④Get the audience involved

質問をしたり、ポイントを繰り返させたりして聴衆を巻き込むべし。

⑤50% read, 50% look up

視線を上げるべし。

⑥Gestures change voice

ジェスチャーは声のトーンをコントロールするのに役立つと心得るべし

⑦Backward chaining

練習は結論部から、序論のほうに戻るようすべし。

⑧Nervous crushing: Stop-Breathe-Think-Act

緊張したら、まず立ち止まり、深呼吸をし、よく考え、行動すべし。

最後に以下のように Physical Message をホワイトボードにまとめたうえで、プレゼン時の要諦を簡潔に示された。

- 1) Posture→How to stand
- 2) Eye Contact→How to look at the audience
- 3) Gestures→How we use our arms and hands
- 4) Voice→How we speak to the audience
Stop / Breathe / Think / Act

5.2.3 東芝地球未来会議へのサポート 担当：八宮孝夫

5.2.3.1 はじめに

東芝地球未来会議とは、東芝国際交流財団の支援で米国、タイ、ポーランド、日本の4カ国から、それぞれ2校4名、合計16名の生徒(と引率教員8名)が集い、環境問題や持続可能な社会の発展について討議しあうものである。この会議は5年前から始まったが、本校が参加したのは昨年からである。当初は東京・千葉で開催されていたが、震災の関係でこの2年間はタイで行われており、期間は8月上旬の7日間である。今年度は前半3日はバンコクから北東200キロのチョクチャイ農園、後半4日はバンコク市郊外のチュラポーン研究所に宿泊して、討論やプレゼンテーションを行った。

5.2.3.2 チョクチャイ農園での活動

この農場は家畜の飼育、野菜果物の栽培、直営のレストランがありバイオディーゼルの研究なども行っ

ている、それ自体自給自足可能なシステムになっている。宿泊はテントで、異なった国からの2名が1つのテントで過ごすことになり、非常にお互いを深く知る機会となる。

初めの3日では、お互いを知るためのゲームをしたり、pre-assignment として設定されている「お互いの国・学校紹介」などを行った。もちろん、農場の一部を利用して「環境問題セミナー(CO2 測定)などが、地元の大学の研究者によってなされた。また、アイスクリーム体験や、水田作業体験もあった。基本的には、教員も同じところと一緒に体験することもあるが、教員は別行動で「教員プレゼンテーション」として、お互いの国の学校制度や、それぞれの学校の紹介を行った。



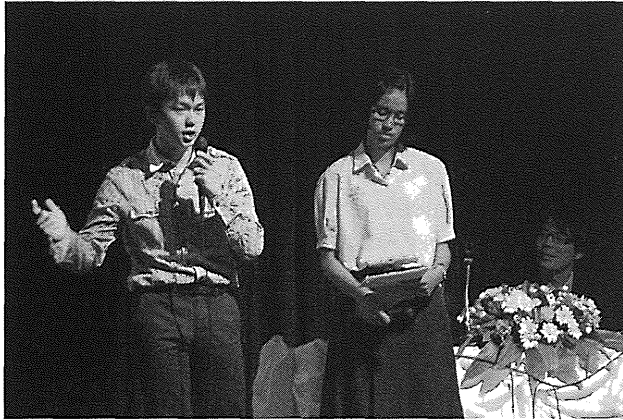
(チョクチャイ農場にて)

5.2.3.3 チュラポーン研究所での活動

こちらでは、バンコク市内に近い地の利を生かして、講義ばかりでなくフィールドワークも行った。討論としては、「地球との調和を阻んでいるものは?」、講義として「貧困をなくすには子供の教育から」。フィールドワークとしてエネルギー省訪問 (EnCo)などを行った。夜になると、毎日行ったことを Act Eco Journal という新聞にまとめる作業があるので、ただ聞きっぱなしでなく、自分の言葉でまとめなくてはならない。英語にハンデのある3カ国は、アメリカからの生徒が表現の上で支援しながら進めてゆく。これもいい勉強になる。

後半では、最終日の発表に向けて、プレゼンテーションの講習があったり、関心のあるテーマごとにグループ分けが行われ、それに基づいて討論を深め、発表の内容をまとめる。

最終日は、立派なホールにて発表、質疑応答がある。



(発表する本校高校1年生)

5.2.3.4 まとめ

わずか7日間の地球未来会議だが、英語により討論することで、初めは臆していたものが、徐々に打ち解け、英語でのコミュニケーションに慣れてくるようになる。と同時に、深いところで、まだまだ十分な意思の疎通や自分の主張を述べるできない歯がゆさ・限界も知ることになる。しかし、その不十分であることの自覚が、更なる勉強の動機づけとなる点で、このプログラムは素晴らしいといえることができる。

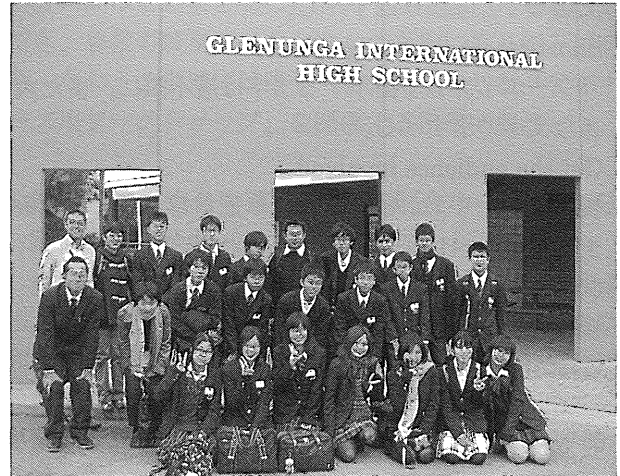
5.2.4 オーストラリア理数系授業体験プログラム

担当：多尾奈央子

5.2.4.1 概要

都立小石川中等教育学校のコア SSH プログラムに生徒4名（高1生3名、高2生1名）が参加する機会をいただき、8月上旬から14日間でオーストラリア南オーストラリア州アデレードを中心に研修活動を行った。

本プログラムは、通常の教育課程と別科として IB（国際バカロレア）の教育課程をもつ学校で進められた。2週間の滞在期間中は、事前学習で分けられた英語のレベルにしたがって授業に参加した。既習の内容を英語で受講することは、内容については重複するものの、表現の仕方など新たなことを習得できたようで、新鮮な思いであったようだ。他に、市内の文化施設を見学したり、周辺の大学で模擬講義をしていただいたりと実質10日間ほどの研修期間で盛りだくさんなプログラムであった。様々な施設を訪問し、現地の人々とも交流に参加させてもらう機会が多い中で受け入れ校での授業が4回～5回と少ないものであったのが残念である。



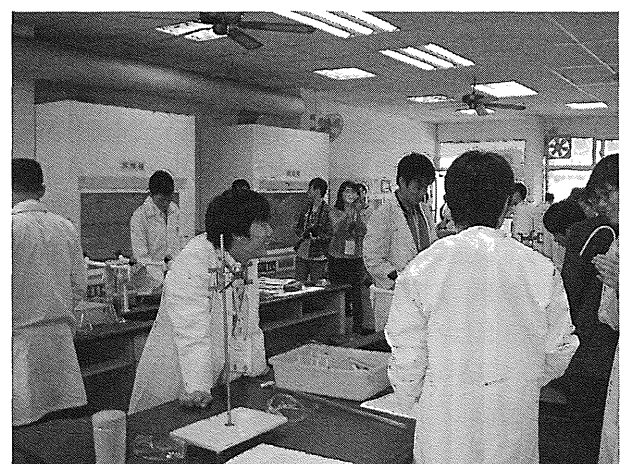
5.2.5 台湾国立台中第一高級中学との研究交流へのサポート

担当：山田忠弘

5.2.5.1 概要

台中一中との交流も今年度で4回目を迎えた。高2生徒12名、高1生徒4名が参加し、6日間の台湾訪問の内2日間を台中一中での交流に充て、理科(化学・生物)の授業への参加や学校紹介、研究発表などを行った。台中一中の理科の授業はすべて英語で行われ、英語科以外の教員の英語運用能力の高さに感心した。

生徒の交流は学校内だけに留まらず、研究発表終了後に、台中一中の生徒が本校の生徒を連れて台中の夜市を案内してくれるなどの暖かい歓待を受け、大いに深まったと言える。翌年5月には台中一中の本校訪問が予定されており、さらなる交流の発展が期待される。



化学の授業



研究発表会場にて

5.2.5.2 プレゼン指導

これに先がけて今年度も Vierheller 夫妻による参加者対象のプレゼンテーション指導が行われ、パワーポイントの構成や話し方の所作といった面からのアドバイスをいただいて、本番の発表に臨むことができた。(5.2.2 参照)

5.2.6 韓国・釜山国際高校との交流へのサポート

担当:八宮孝夫

5.2.6.1 はじめに

本校はSSH校として上述のように台中一中との研究文化交流を続けているが、これは主に理数科に興味のある生徒中心のプログラムである。本年は、筑波大学から「附属学校のグローバル化に資する事業」として「アジア諸地域の教員・生徒と本校教員・生徒との研究交流の促進」として予算をいただき、その一部を文系に興味のある生徒のためのプログラム開発に充てた。幸い、以前から釜山国際高校が本校との交流を希望しており、本年度4月に「2013年1月中旬訪問したい」との打診を受けたので、本校もそれを受け入れるとともに、「2013年3月下旬に釜山国際高校を訪問したい」と希望し了解されたので、この相互訪問が実現することとなった。以下は、本稿執筆時点で予定されていることである。

5.2.6.2 釜山国際高校の本校訪問

期日は1月16日。訪問生徒は、高校1年生の男子2名、女子7名。引率教員2名。以下の日程で行う予定である。

午前 歓迎～学校紹介・自己紹介
日本民藝館訪問、東大駒場キャンパスにて昼

食

昼 集会にて、全校生徒に紹介
午後 5、6時間目 授業参観・参加
放課後、部活動見学その他
夕方 本校生徒が釜山生徒を渋谷まで案内、夕食歓談（並行して教員、歓迎夕食会）

5.2.6.3 本校生徒の釜山国際高校訪問

期日は3月24日～28日。本校生徒10名(高1・5名、高2・5名)引率教員3名。以下の日程で行う予定である。

3/24(日) 14:05 成田発 16:15 釜山着
夕刻 ホテルチェック・イン
3/25(月) 釜山国際高校訪問第1日(授業参観、お互いの学校紹介を中心に?)
3/26(火) 釜山国際高校訪問第2日(お互いの文化・社会について)
3/27(水) 釜山市郊外フィールドワーク
3/28(木) 10:50 釜山発 12:55 成田着

5.2.6.4 おわりに

相互訪問は初めての試みであり、まだ不確定の要素も多いのだが、25年度は5月に台中一中の生徒が本校訪問をすることが決まっており、そのためにも、受け入れの経験を積んでより良きものにしていく必要がある。

6. おわりに

以上概観したように、本校での国際交流の活発化とともに英語科が担う部分が拡大してきた。生徒のプレゼン能力の向上に向けてさらに工夫をこらしていかなければならないと同時に、「国際交流＝英語科」というステレオタイプから脱却し、他教科の先生方をいかに巻き込んでいくか、も今後の大きな課題である。

【参考文献】

- 柴原智幸(2012)『攻略!英語リスニング6月号』NHK出版。
玉井健(2005)『決定版 英語シャドーイング入門編』、コスモピア株式会社。
東京大学教養学部英語部会編(1998)『The Universe of English II』東京大学出版会。
鳥飼久美子(2003)『はじめてのシャドーイング』学研。

- 松本茂他 (2009) 『英語ディベート 理論と実践』
玉川大学出版部。
- 山本史郎 (2010) 『英語パーフェクトリーディング』
DHC。
- 山本史郎 (2008) 『大人のための英語教科書』IBC パブ
リッシング。
- Kisslinger, Ellen (2009). *Contemporary Topics 1:
Academic Listening and Note-Taking Skills*.
Pearson Longman.
- Murphy, Raymond (2012) 『マーフィーのケンブリ
ッジ英文法 (初級編) 新訂版』 Cambridge
University Press.
- Smith, Rod (2002) *The Long Road* Pearson
Education Limited..

<テキスト類>

- NHK ラジオ『基礎英語 1』、『基礎英語 2』、『基礎英
語 3』 (NHK 出版)
- “Collected Modern Short Stories (Love&Humor)”
(1990) マクミラン ランゲージハウス
- “Short Stories by O. Henry” (2007) I B Cパブリッ
シング
- “There Will Come Soft Rains and Other Stories
(British and American Short Story
Masterpieces I)” (1991) 金星堂